

令和5年度 日本語指導拠点校報告書 広島市立白島小学校

1 学校の課題

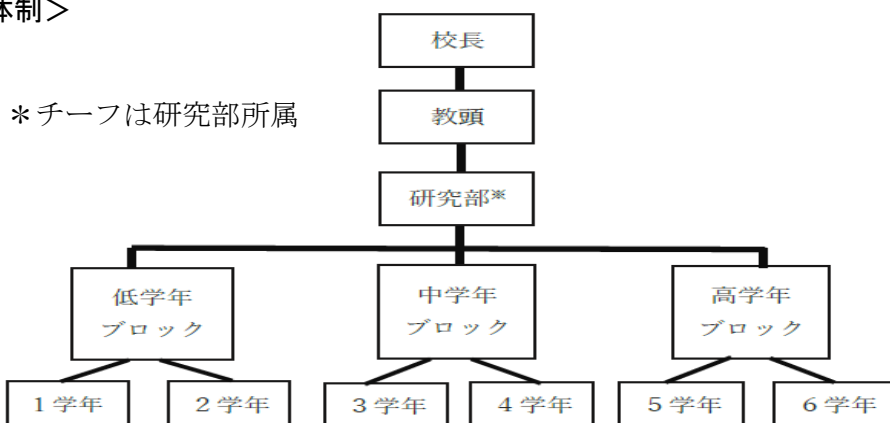
- 日本語学習教室担当教員と学級担任との情報が共有されていないことがある。
- 在籍学級では、まだ自分の思いや考えをうまく交流することができていない児童がいる。

2 研究主題

多様な児童が主体的・対話的に学ぶ授業づくり
— 関わる力を育み、自分たちの学びを評価する力を高める —

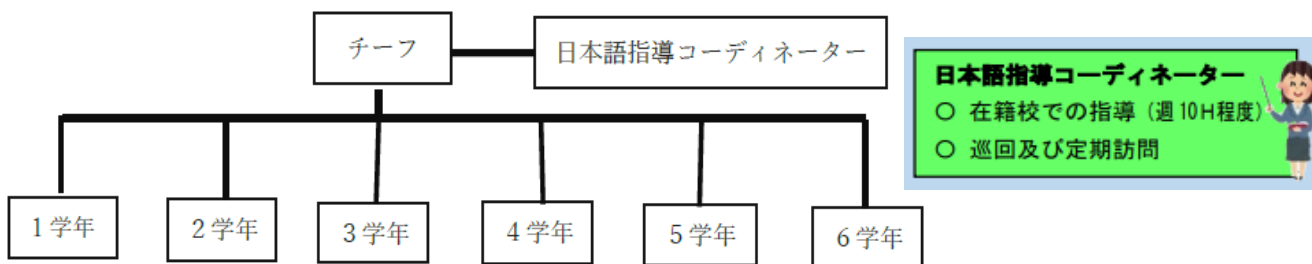
3 取組内容

<校内研究体制>



<日本語指導体制>

- ※ 日本語指導担当者は、各学年に所属
- ※ 日本語学習教室担当者は、3・4年の外国語活動の授業を行う。



日本語指導コーディネーターによる巡回訪問

- 初期適応指導支援
- 児童生徒の実態把握 (DLAの実施 等)
- 個別の指導計画作成に係る助言
- 日本語指導協力者との連携
- 人権教育の視点から見た日本語指導の助言
- 児童生徒・保護者との面談に同席し助言
- 進路に関すること 等

白島小学校

日本語指導コーディネーターによる月一回の定期訪問
日本語学習教室における指導の在り方について助言

東浄小学校

- ・小学校 (東、南、安佐南、安佐北)
- ・特別支援学校 (小学部)

(1) 指導内容について検討する。

- ・ 日本語指導と教科指導の内容を検討し、取り出し指導を行う。
 - デジタル教科書による音読の学習を推進する。
 - 国語科、算数科において、日本語学習教室担当者と学級担任等が指導内容の共通理解を図る。
- ・ 通常学級でも日本語学習教室担当者が授業を行い、学級担任と学習言語や、やさしい日本語についての共通理解を図る。
- ・ グラウンドルールを学級担任と共有し、連携を図る。



(2) 子供同士の関わりを作り出す。

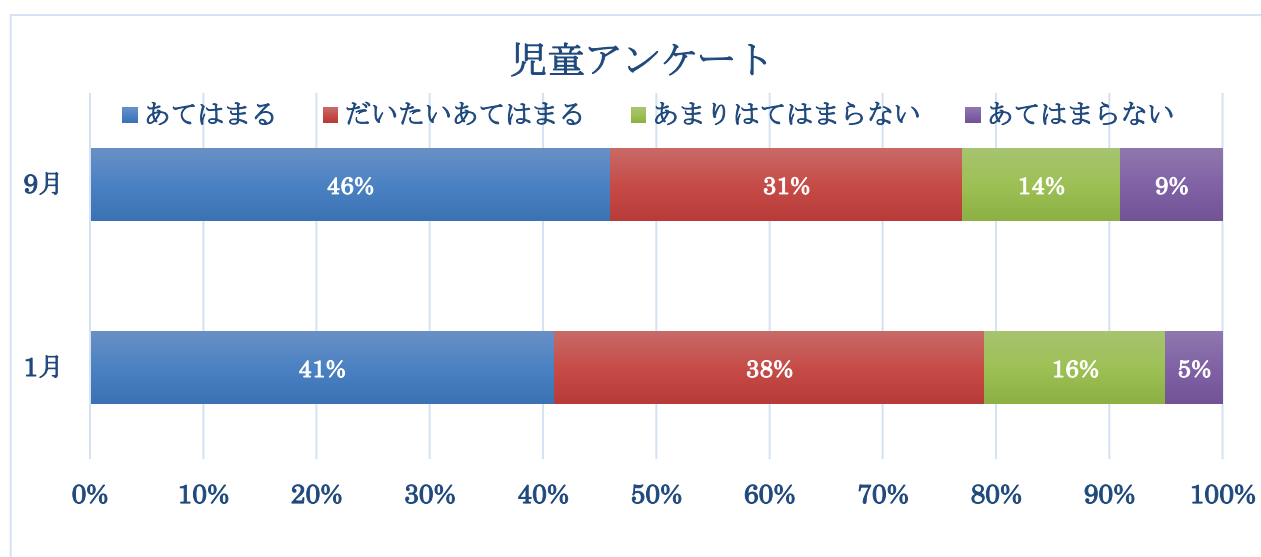
- ・ 失敗や間違いを大切にする雰囲気づくり。
 - 日本語学習教室担当者が外国語活動の専科となり、意図的な「関わり」の創出を行う。

4 検証結果

○ 国語科において、^{※1}児童が主体的・対話的に学習に向かっていると考える教員の見取りは、9月では85.4%、1月では91.4%であった。

○ ^{※2}児童アンケートでは、「友達と関わることで、自分の考えが広まったり深まったりした」という項目の評価で検証した。

下記のグラフがその結果である。



「友達と関わることで、自分の考えが広まったり深まったりした」と肯定的な回答をした児童の割合が増加した。

^{※1}教職員対象アンケートより抜粋

^{※2}日本語指導が必要な児童の結果（37名）を児童アンケートより抜粋

5 研究成果

研究の結果としては、以下の3つが挙げられる。

1. 児童の変化

「友達と関わることで、自分の考えが広まったり深まったりした」という項目において、肯定的な回答が増えたことは、在籍学級の友達と関わり合いながら学習することのよさを感じることができたためだと考えられる。

教員が意識的に児童同士を関わらせる場面を設定することで、主体的・対話的に学習に取り組む児童が増え、自分の考えが広まったり深まったりしたと感じる児童が増加したと考えられる。

2. 教職員の連携・日本語指導に対する意識の高まり

日本語学習教室担当者が外国語活動の専科として在籍学級に入り指導することで、日本語指導が必要な児童を意識した意図的な「関わり」の創出を行ったり、やさしい日本語を用いた授業を行ったりすることができた。

また、学年に配属されている日本語指導担当教員が学級担任と一緒に国語科の教材研究を行ったり、日本語学習教室での様子と在籍学級での児童の様子を共有したりすることも増えた。教材研究を一緒に行うことで、学級担任と学習目標を揃えることができ、学習目標の達成に向けて教材をどのように工夫していくか話し合うことができた。そのことによって児童が主体的に学習に取り組む姿が見られた。

3. 授業公開による研究成果の共有

11月に開催された第53回全国小学校国語教育研究大会（広島大会）において日本語学習教室の公開授業を行った。本校においては、教職員が日本語学習教室の事前授業を参観することで、普段知る機会の少ない日本語学習教室での個に応じた支援や指導方法を共有し、在籍学級で授業を行う際にそれらのスキルを取り入れる手立てとなった。



また、本校だけでなく、広島市の日本語学習教室設置校と連携し、教材研究、事前授業を行うことができた。

当日は、広島市の日本語指導に関わる教職員及び日本語指導協力者への案内を行い、授業公開・学校の取組の報告をしたことで、広島市全体の日本語指導の充実に向けて、日本語学習教室での取組や研究について発信することができた。



※ (QRコード) 当日の指導資料

一方、「友達と関わることで、自分の考えが広まったり深まったりすることができていない」と感じる児童が2割程度いることから、自分の考えを表出することへの難しさを感じていることが課題ではないかと考えられる。在籍学級の友達との関係づくりや考えを広げたり深めたりする話し合いのスキルが習得できるよう、引き続き日本語指導が必要な児童について支援していくとともに、目指す児童の姿を学校全体で共通認識をもって取り組んでいく必要があると考える。